最上盛衰記　上

重忠家蔵之

山形県立図書館
66153

最上盛衰記上之巻目録

一 最上家代々之事
一 義光公高湯温泉入湯之事
一 義守公御逝去之事
一 上山義政松原合戦伊達輝宗加勢之事
一 里見民部逆心之事
一 里見内記之助妻子奥州へ落行事
一 谷地の城主白鳥十郎討るゝ事
一 達磨寺原合戦寒河江落城之事
附 大江家系図之事

K289
MO
1

一 八ッ沼合戦岸美作守降参之事
一 山形勢天童に発向之事
一 天童喜太郎狐之事
一 日野能登守降参并勇力之事
一 山形勢天童城へ押寄る事
一 天童落城之事 同頼久公奥州へ落行事
并 山口河原子両村戦ひ之事
一 天童愛宕山建立之事
一 山寺衆徒退散之事

最上家代々

一 人皇五十六代清和天皇七代之苗裔鎮守府将軍陸奥守源義家朝臣十代之後胤斯波修理大夫兼頼公
康暦元年己未六月八日逝去
光明寺殿其阿上人成覚就公ト号ス
二代左京大夫直家 一説貞家 應永十七年庚寅正月六日
金勝寺殿月潭光公ト号ス
三代 修理大夫満直 一説満貞 應永三十三年丙申八月三日
法祥寺殿念叟観公ト号ス
四代 修理大夫満家 應永三十年癸卯十月廿三日

禪專寺殿虎山威公卜号ス

五代 左京大夫頼宗 嘉吉元年辛酉二月五日

雲龍寺殿一溪守公卜号ス

六代 左京大夫義春 文明元年己丑三月三十一日

龍門寺殿天眞源公卜号ス

七代 修理大夫義秋 文明十二年庚子十二月二十七日

隣江院殿松岩芳公卜号ス

八代 治部大夫満氏 明應三年甲寅八月十日 一說四月十四日

國成寺殿月心光公卜号ス

九代 左京大夫義淳 永正元年甲子十二月十二日 一說七月十日

龍昌寺殿天鏡春公卜号ス 一說惟翁勝公

十代 左京大夫義定 永正十七年庚辰六月四日 一說八月四日

雲昌寺殿惟翁勝公卜号ス 一說義定翁公

十一代 左京大夫義守 天正十八年庚寅五月廿七日

龍門寺殿羽典榮林大居士卜号ス

十二代 少將出羽守義光 慶長十九年甲寅正月十八日

光禪寺殿玉山白道大居士卜号ス

十三代 駿河守家親 元和六年庚申三月六日

盛光院殿安昌景長公卜号ス 二十六歳 義光次男實ハ四男

源五郎義俊 寛永八年辛未十一月廿二日

月照院殿花嶽英心大居士ト号ス
家親ノ子（一説義光五男家親ノ弟トモ云）江州大森ニ移ル二十六歳ニテ於江
戸ニ死去其時義俊ノ子息形部義智ハ二歳ナリ
義光嫡男修理大夫義康　慶長八年癸卯八月十六日
常念寺殿補天錦公大居士ト号ス
寛文二年壬寅六月三日
掩粧台院殿華柳壽紅大姉　淑靈
家親室西三條右大臣女
牌所江戸浅草萬龍寺

# 最上盛衰記巻之上

一最上義光公京図并高湯温泉入湯之事

出羽國山形の城主最上出羽守源義光と申ハ先祖を尋
るに清和天皇の後胤鎮守府将軍兼陸奥守源義家朝
臣より出て、義家の五男式部大輔義國其子足利判官義
康其子上總介義宣其子左馬頭義氏其子宮内少輔泰
氏其子斯波尾張守家氏　其子小太郎宗氏　其子伊豫
守兼家其二男を修理大夫兼頼公と申是を最上家の
祖と云也此兼頼公奥州大崎郡斯波と云所を領し玉ふ
後光厳院の御宇足利将軍の在世延文元年丙申七月

六日出羽の按察使に補せられ同き八月六日に最上山
形へ入部あり二十余年の星霜を経て康暦元年己未
六月八日逝去ん光明寺殿是也 其子右京大夫直家二代
其子修理大夫満直三代 其子修理大夫満家四代 其子左
京大夫頼宗五代 其子右京大夫義春六代 子無し舎
弟修理大夫義秋七代 満家の三男光良子とん 其子中野
治部大輔満氏八代 其子右衛門佐義淳九代 其子左
京大夫義定十代 子無し舎弟義建中野殿の子義清の子
を養子とん 左京大夫義守也十一代 其子出羽守義光
十二代 と相続して山形を居城とん 応仁の乱

よりこのかた武威漸く衰へ奥州鎮守府も出羽の按察
使も唯名のミにて義守の時迄は纔に山形近辺は
かりを領せられしが 義光公は生れ付智勇人
に勝れける故近隣を打なびけ数ヶ所ひらきて張大に
成り出羽一國の守護と成らる 其子細を尋ぬるに
永禄元年の秋義光公十三歳一説十六才の時御父義守公
ともに當國高湯の温泉へ入湯のため数日御
逗留の折から或夜近辺の盗賊共数多御旅宿
へ忍び入りけるに近習の者起き合ひ厳敷防き戦
ひけるが義光公若年なれども力量人に勝れ勇気

盛んにまたゝきもせす真先に進ミ近付盗賊と切合二人
手を負せ一人を引組ミ突殺し玉ふ御父義守公御覧し
て限りなく悦ひ玉ひ翌日御帰城有りて御家に伝へ
まし笹切と号せる名釼を取出し抑此太刀ハ昔十七
歳の時楯下崎にて誉を取し時此場にて父上
より譲受たる太刀なり既に此度和殿の働き並
ふるひなけれハ譲るなりとて手つから渡されたる義
光公限りなく悦ひて頂戴なされけり

## 一 義守公御逝去之事

一 抑義光公御家督相続有て後ち天正十八年三
月廿日の頃より御父義守公御異例の心地にてうち
伏し玉ひける故諸寺諸社の御祈祷残る所なく数
手を尽し玉ひけれとも其しるしなく終に同き五
月二十七日行年七十歳にて御逝去なされける尊骸を
義守公建立し玉ひける登龍山龍門寺に御葬送御
弔ひありて法名ハ龍門寺殿羽典栄林大居士と号
し奉る

## 上山義政松原合戦伊達輝宗加勢之事

一 爰に上ノ山の城をハ越前守義政とて予ての義光公の為ニハ伯母聟なれとも内ニハ義光との中不和なりけり或時義政家老里見内蔵之助同民部を召して密に知る如く義光とハ内々不和なり然るに義光近隣の楯を責落して其勢ひ頗る隆大となれハ定めて此城をも押領せんと計るへし左ある時は此城小地にして一身を以て敵対成りかたし伊達輝宗ハ義光の姉聟にて其腹に男子ありといへとも是又日来不和なる由ニ及聞けりいさ此時照宗を頼ミて加勢をうけ山形へ

押寄せんと思ひしに如何なる事ニや宣[?]里見通り伊[?]御出[?]なく
なり照宗公大勢御加勢と有らハ義光公も定めて出張
有るべし照宗公と御對陣ある時味方の勢各々伏兵至き
思ひ寄らぬ事ぞと責かゝり戦ハて定めて御勝利あるべしと
申されバ義政悦び以て使者を米澤へ遣し照宗公
へ書翰差上られハ照宗公領掌し玉ひ近々出陣あるべき
旨返状を渡されるに義政大に悦び玉へバさらバ用意
せよとて俄に陣屋立並べ要所に大木伐り倒し逆
茂木を引きて米沢の出陣を待ける處山形へ隠れ
なく義光公聞召し伊良子宗牛を召れ義政と照宗

一味して押寄来る由先手合の戦ひは成沢なるべしと急ぎ
彼所に引き道中に力を添へ成沢城あるべしと手勢都合
八百余騎の四方へ柵を構へ厳重に守り居られたるに
伊達照宗四五日過て一千余騎を引率し上山へ出陣ある
旨義政と軍評定ありて照宗の勢一手に分一手は
松原より押出一手ハ東の川を伝へ敵の後へ回り上山勢
小勢なれバとて彼所の難所に伏兵をさし山形勢寄せ来る時
多勢を討り伏兵一度に起り敵を難所へ追ひ込み討取へしと
て義政先陣をいたし頃ハ天正八年四月十三日渡井沢よ
り発向ス去程に義光公氏家尾張守日野能登守

志村伊豆守等を召集め評定有り尾張守申けるハ　敵大勢
押寄来りし孫に義胤要害内たれハ謀ありもあらん深入ハよろ
しからす假令放沢の城責るとも落されましさもあらば後詰
して内外より包み合ひ戦ふて　敵を定めし往還へ引くへし
其時勢を南へ廻いし　三方より引包んて責届くへし　敵城
沢の城へ押よせ松原邑へ打て出てハ　柏木山の内へ伏兵を
立て不意を見て相図を定め三方より押包み討へし　柏（柏木山ハ松原裏西の方山辺）
定めて其勢一千余騎押出し照宗の先陣五百余騎松原
辺在家に火を放ちて鬨を三つと作り余る山旅勢も同く鬨を
揚け少に入り乱れ出戦ふ半時計り戦ひ相引に引退く

照宗是を見て先手に二陣入替ると下知し玉ひ黒沢
へ参りしは時に義光の本陣まて　五百の太鼓打ならしハ
伏兵一度に起り山の腰へ走せ出て照宗の陣を見て鯨
けて鉄炮雨霰の如く打かけれハ義光公の本陣の勢
打てかゝる思ひよらさる事なれハ照宗の旗本裏崩
れして見へけるを尾張守能登守伊豆守始めとして
照宗の旗元へ切て入れバ米沢勢色を失ひ先の者ハ突
を先途と戦ふうちに照宗漸く上ノ山へ引取けれは
義光も引取玉ふ此合戦ニ双方手負死人多かり
しかれとも伊達照宗公の奥方此本を略

強ひゐき上ノ山へ出越し玉ひて和睦を美さ如く御扱き
候れハ照宗公御了承され依て照宗公の奥方ハ義光の
姉君なれハ義光公へ包みなく其旨有しゆへ和睦ありて後
照宗公（輝宗也）置賜長井の城へ帰陣なされける
本文の上山城主筑前守義政 一説義光物語にハ小梁川左京
大夫満兼とし一説里見日向守満兼とし一説筑前守
義政とし又一説兵部大夫満兼として 諸説まちまちなり
然るに上山城主代々記と年代を合する時ハ本文ハ義政
成るへし去れハ上ノ山城主代々記の武永義政あり
按に里見日向守満兼とする本満兼ハ天童の城主

里見家二代伊豫守頼泰の次男日向守満兼始て
上ノ山亀ヶ岡ニ居城し又里見元祖頼直の三男満長
の子満兼ともあり頼直ハ正應三年に没せし人なり
其人の孫としても年代あまりに隔たりしを義政と満兼
とを書誤りしものなるらん
又一説伊達輝宗の末を仙臺とする政宗に至て仙臺を居城とする
故ニ照宗か数十年を仙臺と書しものあり 輝宗の時ハ置賜郡
長井庄夏苅に居城し天正十三年十月八日畠山義継の為
に害に遭ふて没せし時に四十二歳仙臺居城ハ政宗慶長六年
ニ城築有りし事あり

里見民部逆心之事

一 其後義光公氏家尾張守を以て今度の軍ハ義政
申されを取るにてもなられ和睦の事(伊達輝宗帰陣なされ
ハ助力ニ此勢も無し此御義政を討取るべしと有り
これを尾張守御説きまいらせおかかり義政方ニハ里見内
蔵之助同民部等勝れたる者なれば容易く落城を
まじ何卒計策を用ひ然るべしと其の家来の者な
る者出家いたし上ノ山増念寺に罷在り日頃里見兄弟
へ出入心安しく彼の兄弟にてもよき思賞を与ひ出
あらハ此僧を頼み計ひ申さんと申せハ義光公何能

計ひ申べしと仰せられけれハ尾張守早速彼の僧を呼ひ寄せ
委細申含め遣しける僧里見内蔵之助方へ行き四方山
咄しの語のつゐへ申けるハ愚僧か兄ハ氏家尾張守殿の内
罷有り昨日申来るにハ義光公近日此地へ御出陣有る由
何とまても穏かならまじ愚僧の考へても御落陣すべき極内々
申されけれハ然らハ今迄ハ輝宗公を海山と頼みまいらせ
和睦の上ハ御味方にて有まし山形勢押寄せ
なば落城近かるべし然る時ハ里見の御家も危からん
それ迄ハ余り有り何卒御思案然るべしと申されハ里
見内蔵之助聞て今義光輝宗和睦の上ハ味方の勝

力なし大勢をうけ防くへき要害もならざれ運も法
きあれハ落城せんありとて代々の主君を捨て身を遁れ家
を全ふせるハ武士の本意ならざれ不論此城を枕として
討死の外あらしと示合を極めて云ふれハ信も力及ず
夫よりも民部少輔へ行き内談し已へ申ぬく云ふれハ民部
少て暫息し上山の小勢を以て義光の大軍へ敵さく
らんや滅亡時日を移さへからんさあらん時ハ主君光を始
此ほやらくと討果んより無念なれ不論義光公へ属し
先祖の名れをなけ子孫の後栄を致ハまほしく也と
夫ハ降参不義の者と云ふれんも口惜しく只心をしく

もなかりしと語りけれハ信も心よ悦ひて尾張守へ行くと
申されハ尾張守悦ひ義光公へ於て越申上れハ義光卒
悦して即ち直筆認させしと尾張守に封入れて
彼の信に渡し信立帰りて民部方へ差出に民部押
戴き披見して信にも申らに此の度我ら色底義光公の
幕下に入らんとの直筆頂戴致しけり偏に貴殿の
厚恩不浅しとて白布袷端是ハ当座の引出物なりと
さらせて互に面を見あはせ申事も中々世の常ならず即座
に左様成し予上ニも主君をも討果さへきと評議を究めけるに
傳山形へ馳せ行き尾張守に頼むと申されハ能くハ民部方よりも

遂しへきとて矢桐相模守を忍ひて上山へ陽と出立ける
民部方へハ病と云て民部ハ見内記と聞て呼
寄せ我々ハ味方に頼み度と是なる矢桐相模守茂
出たり如何思召と云けれハ内記しハ談じ其の年来に
て縫合如何様なる義なるも隠密にこそ計ふへきに欺
を偽りに来るき我を呼出し私落ハ何れなるも何れ此内記し
聞ても思ひも寄らぬ全く存知なしとて眼に角を立
て詰まりを見廻し立んとせしを民部太刀を抜き打て
かゝる内記に聞出る者あれハ桜台で請止め闘ふ所を
矢桐後ろより切伏せんとし兼て申合せしことなれハ伏兵

一度に起りて内記に聞ゐ供人を討留めたりまより義政
近習なる侍に佐竹平内と云者に兎も角にも志あり忠義
合點平内当くも登城し既に其夜も亥の刻ばかり放
ち義政公川もたし居り機嫌能く中才山の噺しまて亥の首に
何時なりん気鬱疲れ好けれハ少々休息せんとて寝所
に入り給ひしに天正八年八月（一説十月）二日の夜是そこの世
の別れとなり近習に詰し侍とも平内も覚にて思
ひの外の眠りに心よ何れも睡りのうち頼むと云ふ
者あり討たれ酒宴と寝の内に眠り頼むと云れハ平内は
若き人々なれハささえ命ちめ疾く帰返り 何れおろしく頼

去とて人々出て行きぬれハ平内も志すましたりと悦ひ
義政の寝所へ近寄り御寝覚にやと問ひぬれとも返事
もなし扨ハ時分よしと坪の塀を乗越て忍入ぬれハ
相模守民部もろ共忍ひ入り書院より内へ入りて義政
前後も志らす伏し玉ふ所へ立寄り義政を切りて我
こそ義光の家臣矢桐相模守光起なりと云よりはやく差
殺し首打取り民部と家来へ立帰り首尾よしと悦ひ
家来の停岡治助と云者に首を持せ早々山形へ差し
ける近習の輩是を知りて大に騒き驚ぬれ共兼て山
形より大勢入込隠し置たる故に異儀に及ハれ皆々
隠居いたし候所義光公御帰城有り依て平内にも過分
の御褒美を給はり里見民部ハ以前来の通り義政の
居城跡式一万五千石被下されて民部を改めて里見
越後守とぞ名乗りけり

## 里見内蔵之助妻子奥州へ落行事
### 并勘四郎君父の離言を詠る事

一 去程に里見越後守思ひけるハ内蔵之助に子二人有り一人ハ
男子なれハ元若か者成長して打敵を討んと相ぬれに義光公よ
り内蔵之助の妻子を誅せられ候由仰出されぬれハ幸と悦ひ
内蔵之助の妻子を隠密にて曲事たるへし 請人或者

安養寺十七世
心應玄宅和尚の時之
慶長二年丁酉十五月十五日寂せ

羊郷村
解大山安養寺
ハ能州大本山
直末にして開
山ハ無著妙
融和尚なり明
徳四年癸酉八
月十二日寂せ

何らハ褒美さへ絶しと在々を離れハ内親も血肉宗ハ孫
勤砌り在所ニ深く忍ひ居たるか武士を少々住居成しか
さく下女を人召連れ牧羊に紛れて遠く行き羊郷村安
養寺へかけ込て番細ニ頼まれハ住持ハ法有和尚にて
さぬくと命拾しかくまひ呉るり妻子ハ奥州ニ御ありし
有るをたよりて密かに奥州の方へと落行きけり軒て年
月を送るに男子成人して里見勘七郎と名のりけるに
も常らぬものとて成りたる成長なるに憶ひ父の事を日々
まゐるに母の涙なから細々と語る勘七郎少て無念
骨髄にてつし主君親の敵き越後守を何卒一太刀討

て恨ミを報せんものと常に忘るゝ時なく法ある山形
に忍ひ入りて窺ひたる越後守用心厳敷なりけれハ
討べき様なく勘七郎種々心を尽といへとも中々討ち
得ざりけれハ越後守に男子三人有りけれハ子なりとも討果
して親の恩を志さんと思ひて子息など狙ひ居り
去程ニ越後守子細有て山形を立退き親族引具し
加賀國へ至り中納言殿へ御奉公志けるか家来とも暇出され
其より越前少将殿へ抱へられたるか五児を殺せし大罰ニ
やがて家も追出され詮方なく高野山へ登り出家せしか
後ちまたゝ山形ニ来りつゝ唯一筋ニ念佛三昧の身となり

居たりける勘七郎郷と志しける身は諸国を廻り名高き山林に
居ける国々にて漸くに君孫君ひ入り見れハ早入道して
備ふ向ひ居たりけり 勘七郎声をかけいらに和傳越
後守にてハなきか我ハ汝に討れし内藤か忘れ形見
勘七郎と云者なり父を討れし其無念骨髄に徹し
汝を討て主君父の讐を報んと山野を宿とし昼夜
心を尽せしも廻り会さる無念さに汝か子を討しも我
なり今汝にあふて討んとすれハ却く入道せしを敵なれハ
とて討へき様なし首なきも同しことなりといへれハ越後
守我俗なりしかは相手にも成るへけれともかく入道の身なれハ
疾く首を取るへしといへれハ勘七郎聞て入道なる者をは
討へきにあらすとて帰りけり是を聞て感せぬものなし
なかりし後勘七郎伊達政宗公へ召出され里見勘七
郎とて大坂陣の時も度々の高名世に隠れなきものなり
或時公私の百姓争論に及ひしに政宗公の裁許を不満に
思ひて仙台を立去りけるハ紀州大納言殿へ召出され千五百
石拝領して子孫繁栄せしといへり 扨越後守ハ法名に仕込
になりけるとなりけり

谷地の城主白鳥十郎討るゝ事

一 其頃山形より六里北の方に谷地と云所の城主に白鳥十
郎藤原長尚又長久とて貪欲無道の城主有り諸
人長尚思ひけるハ今の世中ハ諸士義光の威勢に
恐れ彼に随ふ者多し何れ長尚に於てハ思ひなき
よられハいかにもして義光を亡し山形を押領せんと
はかり其頃天下の武将織田信長公に使者を以て
青鷹一居駿馬一疋を献して 其ハ出羽北按察使斯
波兼頼より以来代々最上の主となる由言上にて信長公
にも遠國の事なれハ左もあらんと思召けるにや速々に

御返状給ハりけれ共此度隠れなく義光公伝へ聞き
易かゝと思はれけれハ家臣志村九郎兵衛を使者と
して白府の鷹一聯月山鍛の鑓百筋駿馬三疋信長
公へ献し彼の白鳥の虚妄をはらさんため累代お談
此系圖を与へ候へ而行かゝ戦乱の砌通路不自由
なる故越後路より上着して山本孝三郎宅に旅宿し
其趣を達し献上物并御系図を差上る信長公御覧
して遠方より使者大義なりとて家康公を以て来
此子細を九郎兵衛に御尋代々の系図歴説ありて扨も
義光ハ信長の降すへき人にあらすとて即ち回簡に自筆

に最上出羽守殿と書給へ遠國よりも急く上りたるとそ
九郎も懐に持鎮物語ありけれハ面目有て山形へ帰り
義光公へ右の趣申上ける所義光斜ならす悦ひ何卒
白鳥十郎を討んと思召家臣尾張守を召され内談
有て尾張守にとく計ひと仰せられけれハ尾張守頓て
状を認め長尚か館へ遣したる使者急き谷地の城に至
して右趣を申のへ彼の状を差出したる長尚披見して
思ふ様ハ今義光ハ武威の誉れなきハ時に始終彼に敵對
も中〳〵叶ふまし此度尾張守の状を幸ひに和睦を
結ひ奉りて加勢を請ひうけ近隣を切随ひ勢ひ張

大に成り如何なる策をもなして義光を亡さんと思ひ和睦
可致旨返状認め使者に對面して返状を渡したる使
者帰りて返状を上れハ尾張守披見して義光公へ
差上る義光公読して咄嘩の氣色にたへん其後吉
日を撰ひ長尚の息女を迎ひ取識に千秋万歳を
祝したる是より互に使者を以て申通の有といへとも
長尚も疑解さりけるにや山形へハ来府するたひもなし
去るに依て義光公尾張守に内談有て其後ハ病氣
と号して外に出玉はん醫療を加へ保養有しかとも
更に其甲斐なく次第に弱り最早今生に存命き

爲きとも思はれは我望しくなれは定めて他より手
を入まん事も計りかたし誰を頼みにあらんと思ひを残さ
ん心安く死しても冥途の障りあるましものをと宣ひ
尾張守聞て我ら親ては候はゝ昨日のも過させ玉ふ共
は在世程には候はねとも頼る遠ふ我々いかにも候らしとな
れとも左程思召玉ふならは長尚殿は頼もしき死と申上られは義光
公聞召実にも此義尤なりとて谷地へ使者を遣しける
程なく範嫌も着して長尚に對面して件の趣きを述
る長尚聞て扱ハ日頃の望を今時を得たり於ぶ不の

幸ひと早速帰府致しへき旨挨拶に及ひ時に天正十
二年甲申六月七日早朝支度を調へ馬に打乗り巳の
刻ばかりに山形へ着けるは山形にハ外に候府をも告る
長尚城下の様子を窺ふに屋形様の御気色以の外成
とて上下色つなくとよんへろたる所城よりハ若者の侍先
立て家老衆外様へ迎ひに出らに式礼して城内へ入りね
長尚城内に入り屋形の御体を見廻せハ奥の次迄諸士列
座し寝所の次にハ一門家老衆譜代の面々なと居たり
書院にハ寶幢寺成就院其外寺社方醫師等数多
相詰居る御寝所より疾く此方へ御入なと有りければ

長尚始て其枕元へ近寄りて稍過此様子とハ存し
よらん只今迄逐一案の外小身の定ハ此免可あらハ
自殺の次第も何らハ修理大夫殿の御本心最も思
召次第に移り候ハせん如何様の筆教ハ一々端々の心ゑ
なく被仰付様と云されハ義光公快き風情にて介
抱せられて起上り我らか命も知れぬ身と成り候細
く思ふ然るに中途御出の家臣の對面近臣悦ハ我ら
か果なハ修理大夫来る若輩なれハ他家より如何なる事
もはかりかさし其御ハ諸子継様を頼み申なり末代々の
家の当国も修理大夫成人迄ハ御召置に御預け置こて何やらん

錦の袋に入たる物取渡し詫ひハ長尚請取押し戴き
偖て今出羽の守ハ我なりと云を手と色に顕されて浅ま
しかりし次第なり其時義光居若しきとて居直る袖
まで枕の下成る太刀押取抜打に却詫ひハさしも剛なる
十郎も二つに成て伏たる扨また日頃の本望遂たり
とそ義光公仰ら云畢ふ十郎の供人ハ馳走の為
唐間に並んたるか奥にて此国の太鼓打れハ相図にて打手の
者共三方より押取込め一人も残らさは討取たる其中
に飛鳥軽早とて近習に仕へし小男あり長刀の達
者にて危険者なるか主人の無為心許なく思ひて

其日此供ニ出されりしに城にハても座ニ居るまも人より
下座ニ縁際ニ居て是ハともいまた人先ニ掛抜て谷
地の城へ知らせ在やと思ひ主人の持せし長刀を近く立
人の立居りも目を配り諸手気を付て寝ル所ニ奥
此座敷より二三人の足音して遠侍次の間を開しに
来る音せしかれ是ハやと思ひ長刀押取一のくけ門外
さして欠け出る番の者ども怪くて遠侍の前に告られて
十郎の供人長刀持て欠出さるぞ追まかたぞ追
かくる軽平ハ身一大事と走りたる様に山邸の北外れ
より四五丁あまりに沖の原長町と云所ニて追手の者
共跡付たる軽平取て返し長刀にて切まくる者振廻
為の如くよ人〻ニ寄たる軽平手元ニ近付者とも数十人難
倒し三方に追散し余りに息の切れ〳〵ハ水を呑んと
と思ひとも在家へ立寄隙も無く長町の小村はつれ
後ろ先をさしに残ひ去らず南の方に江満の宿を見掛
て入りたるに数の方を離れに帰りて彼の海へかゝりもと
落たりける追手共此者とも得さりしと打重り軽平を起し
立て首打れたり残まきの人のとうたひ合て山邸にて返り
ける備城中ニハ白鳥十郎を思ひの侭ニ討取候を
吹立叢ニて評議や有けん大将氏家尾張守其外大

龍崎左馬之助・熊沢主膳・鹿子橋主計・米橋弥八・大友
源内・畑谷内蔵助・同権左衛門なとと云ふ究竟の剛の者共
勢六百騎谷地の城へ押寄せ途中より谷地の城へ尾
張守使者を以て申さるゝハ十郎殿ニ子細有て其元に
籠らるゝ由夫に付各方も弓を引かんよりも只今籠を
巻て降参有らんやと云送りける谷地にハ家中寄合
評議ありし中ニ曽根田監物・白石八郎進ミて主君ニ
事まて有らハ降参もよかるへし君討れ給ふを知てなめ
くと降参に出るゝは敵の侮り方便に陥いり後代迄
嘲りを得んも口惜かるへし各方ハ如何思ハれしや我々か所存

は義光既に重病に侵され明日をも知れぬ気色存命
の内対面ありて跡の支配を定め度由使者来る故我君にハ
何の異乱有るへき尾張守に謀られ給ふへき御供の人一人も残
らぬハ不審なりと察するに君謀られ押籠られ或ハ討れ
給ふ二つのうちなり是まさしく敵の策の鏡を見る
か如し兎も角も所詮は使を切捨城を枕として討死
してこそ弓矢面目の法なれ各方ハいかにと云ふより早く
使者を引出て血祭に供の者迄悉く斬て氏家郷を斬と云へ
是れハ尾張守大に怒り是非なしハ攻落せよと鬨の声
士卒我先にと進んで城中にハ門戸を閉め楯籠

来る山形勢押寄せ鯨波を揚れハ城中にも鬨を合せ
大手北門を開き切て出て手々に挑んて戦ひしか寄手
ハ大勢なれハ手を入替攻寄る城中ハ小勢力を合せ
るものもなく疲れはて討り或ハ討れになり城中の
女童ハ我先にと落行く城に早火掛れハ宝河江へ
身を投る者も有り火に入て死するも有り腹切るものもあり
目も当てられぬ有様なり此戦に寄手の兵七十二
人討れ手負二百余人ヽ城中北者三百七十人と云伝へ
ける山形勢勝鬨を揚け城を焼取り人馬の息を休
めけり

参考
谷地町禅宗東林寺の過去帳に
谷地古城主白鳥十郎藤原長久
大陽院殿冊山雁月公大禅定門
天正十二甲申年六月七日
明治十六年未九月東林寺に於て三百年回の法
事執行あり

○

陸奥磐井郡平泉白鳥館跡
白鳥村にあり安倍貞任の弟白鳥八郎行任の居
館跡あり
右平泉志にあり参考の為写

一 遠磨原合戦寒河江落城之事

一 寒河江の城主寒河江四郎隆基と申ハ先祖をたつぬるに右大将頼朝公北條治世建久二年出羽の国司として鎌倉より下し玉ふ大膳大夫大江広元の嫡男大江親広の末孫なり既に是の隆基山形へ属せんと故なき寒河江なとも責落さんとて發向ありて山形より二里を隔て中野の城を出城に構へ人馬の息を休めたり隆基是を聞て急き長崎に出張し出城と出城として遠磨寺原にて防くへきとて 一門の高松左門、安孫子内記、畑沢上野、槙山監物等四人ハ侍大将として橋間勘十郎同嫡子彦右衛門大泉平左衛門等三人を軍大将と相定三百余騎長崎ヲ馳向ひ人馬を休め遠磨寺原まて出合一手に関をつくり矢軍を始ける早打物勝負となりて戦ひける寒河江の橋間勘十郎大剛強の長刀にて達者なり 柄を三尺六寸に構へたるを若黨治と云雑兵に持せなから敵勢を長刀押取切立れハ面を合る者もなし 或る上の者ハ人馬共に切落さる同彦右衛門も劣らぬ若者橋間父子出ると聞てハ恐れぬ者ハなかりけり然るに魚鱗に備へ破らんとすれハ寒河江勢ハ鶴翼に連り諸て射なされ陽に見き陰まさ石公の秘術孫子の秘法

を尽して戦ひけり　寄手おし乱れて見へたる所に高勘十郎
得たりやと樫の木以て八角に削り筋金を張たる棒を持て
散々に打てまわりければ寄手是をたまりかね我先にと逃げ
れば橋間父子勝に乗り中野を追付にて打たる寄手
山形へ引返せば翌日橋間父子軍勢を進めて中野の
城に責かゝる由なれば義光公聞召軍兵引率して中野を
馳向ひは寒河江勢是に恐れてんかたん須川をさして引に
ける所に中野の西舟町と云所に底深き幅三間余の川
有り橋引外し置けるに諸卒皆々越へかねて佇み居
帝吉久と云者十七歳なりけるが越兼て立さりしを高勘十郎兄

かくて是程の小海を越兼し浅ましさよいでく渡しくれんと
舎人を小脇にかいこみ飛越へ行又四五丁先に須川とて
幅三拾間程有り折節水増りて渡舟を流さじと陸に
引上置しを安々と引下し諸卒を乗せ向の岸に
かゝり舟を引揚げ川端に陣を取り山形勢追来るを見て
持楯手々に突並べいる所へ義光一軍を率て向へば此方へも出
向れとのゝしりければ山形勢渡し兼只射ければ散々に射
立られ共持楯にうたれば力なく引陣あり義光公尾張守
を召して扨々橋間父子は敵ながらも血気の勇士勝れたる者
なり何卒助命し味方になし置なば一方の役に立べし

惜しき兵士を殺さん思ひなしと有けれハ尾張守承り左様
思召ハ謀ひ尤申へしとて一通を認め楠間の宮家へ遣しける
勘十郎披見して四郎殿へ差遣る一門良等如何あるへき
と評定を陸甚の仰に縦令計略にもせよ何程の事か
あらん和睦よからんと思ふなり此以後は方便には楽へ参
られと宣ひけれハ楠間是を聞て扨も云甲斐なき所存
存なきれ程痛忽成る事候もあらし向後睦敷志存
味方北合を催し先後やこしと七さんとのたくみ成り所
詮此義ハ其方に任せ候とて勘十郎返状を認め氏
家に使者に渡しける使者立帰り彼の返状を尾張守

披見ありても和睦ハしかるへき筋なりと座に有ける諸
士一同相も楠間ハ花も実も有る侍なりとそ感しける哉
光公宣ひけるハ左程賢く敵を其術に差定へきか討て
捨ん今軍の如く力責にせるならは人の討るはかりにて
即時に勝利有へからす策事を以て勝利を得せん此度
門を鎖て戦をして定て彼血気に任せ出るへきなり味方
責寄ハ防き戦ふへし其時指く退かハ追尾し味方
我軍兵取て返し恐らしく戦ひ引退き敵を座敷へ誘
引出し草の陰々に鉄炮の上手を二三十人伏せ置八方より
打へし勘十郎も卑き此謀を悟らんと其外も打留

る上手二十人撰出し去らし立合見め若目立て打かゝ
ハ打渡られ手も治らん柏子揃へて打へしとて翌日未明に寄
光公出馬し玉ふ寒河江まてハ長崎の楯を家政よりまもると
て大将隆基一門に小泉次郎八郎高橋左近二人ハ侍大将
留守中勢ハ宮本主膳八鍬十兵衛安孫子宮内也人軍奉
行ハ大石原孫四郎寒河江を立て長崎へ出馬に山形勢中
野へ着しと聞へしかハ蓮房原へ出向へ山形勢須川の東に
備を立螺を吹き太鼓を打て一度にどつと押出し折節
川も渡られ川原まて立見を先途と相戦ふ高橋間勘十郎
れ長刀押取人馬ともきらひ打伏せる同夜右近も孫で欠

出負立れハ宗隆の兵士多く討れ山形勢進み来退く様に
見へ多々を高橋間勘十郎是を見て夜を様と下知して追かけ
し責戦ふ山形勢防き兼たる風情にて備て可退く勢十
郎諸卒に先立て大長刀打振り馳せ来るを思ひ讃岐
引かけ伏兵備置て揃て相図の柏子を定め打ち候ふ所
引き候と覚へて頻りに馬を寄せ入り鞍壺に乗り来ると
て引返る義光公の援し可近き敵を打損んじとて
大に怒り玉ひハ浦野源左衛門進み出柏子を揃打ける鞍
壺にて少しも川先き出へハ必ず当り返しといひされハ猶時
宗返しとる所に鞍の前輪より落に合り柏子落を寄せ

見て跡より引払ひ長崎を退きけるを山所勢追来りけれは
無程死骸に石を括付て寵上川の渕に沈込ける扨
楢間討れて後残兵力を落し悉く敗軍して宮河江
江引退く隆基郎と共て一門遂を失ひせんとさわくり
見へけるかかくて隆基宣ふやう敵寄来らハ城を枕と
して討死せんと思ひ切てそ見へけれハ仰詮の如く一ト合戦致さ
れんするハ武士の本意にハ候ハ出向ひ戦て敵の的になりて
討れん城に籠り戦ハ只最早乏て兵粮責に致りやらくと
飢死せんも甲斐無し左思召給ふより一ト先落させ玉ひて
何方も御身を隠し敵に物を思ハせん事こそ武略の為に

義まてゆるさんと理を尽して申されハ隆基少しも其義な
らば一先家を退き関所を求め心静に腹切らんと
宮河江より四五里西に當りて貫見と云所に落行き隆
基宣ふにハ死すへき時に死せされハ生甲斐更になしと
古人の言なりしと時に天正十二年六月廿八日隆基始め
此時殉死十六人に及へり
一門良等一時に腹切死せらるを惜まぬものとてなかりけり
去れ山所勢長崎を攻取り宮河江の城へ押寄せ鬨
を作れとも城中人有うとも見へす我先にと乱れ入り城を
無難取り勝鬨を揚けて其夜ハ城に滞留ありけり扨又
義光公尾張守に向ひ此近辺の餘城ハいかにと尾張

守衛り竜より西に八ッ沼と中ホ城之岸同作守生り
と箕光公吃合之哉なるを昨日貴方へと評議有て
重目ねく鳥を休めまる利

大江廣元ノ父ハ維光式部少輔従四位母ハ飛騨守源仁綱の女なり　文治元
年武衛令望日本惣追捕使時ニ諸國探題守護職置際同二年防
州鳴未荘賜ル同五年羽州寒河江ノ荘賜ル後建暦三年五月武州
横山荘賜ル依テ趣ク建保五年十一月十日薙髪ス後嘉禄元年六月
十日卒ス七十八歳覚阿龍岩ト号ス　廣ハ元武州ニ移ル時寒河江
荘ヲ西方飛騨守仁綱ニ跡ヲ譲ル仁綱受領ス建久三年八月下向始本
楯館ニ住ス後吉川ニ移住薙髪ス依テ阿弥陀堂ノ傍ニ葬ス仁綱ハ元多田満
仲公ノ弟出羽介満成ノ後胤也摂州多田郡吉川之里邑ニ生ル故ニ同名ヲ慕テ吉川
村ニ住ス佛ヲ守護ス文暦元年六月十二日卒ス依テ跡寒河江荘ヲ廣元
ノ嫡男武蔵守親廣ハ受領ス
親廣建久三年外祖源仁綱ノ後跡寒河江荘ヲ領ス時ニ同七年右大臣實朝
公他界時親廣ハ薙髪ス承久三年ノ時勅令ニ依リ院ニ参リ御味方ス六月十
四日官軍敗レ依テ親廣国ニ潜居シテ吉川中嶋ニ於テ出家シ安中坊ト改名ス仁
綱守持阿弥陀佛並満仲公念持佛遺骨ヲ佛体ノ内ニ納メ吉川村ニ安置ス
後関東勘気御免ニナリ阿弥陀堂ノ傍ニ葬ス仁治二年十二月十五日也

廣時　親廣ハ三男須徳院昇殿兄高元早世ニ依テ相続

政廣　廣時嫡子

元顕　政廣嫡子

元政　元顕嫡子南帝ニ奉仕シ宮方ニ討死ス

時茂　元政嫡子南帝ニ昇殿上総介

茂信 時茂嫡子　　時氏 時茂二男　　元時
元高 元時嫡子　　爲廣 元高三男　　知廣 爲廣嫡男
明応三年三月廿八日卒ス澄江寺殿卜号ス　　宗廣 知廣嫡子
孝廣 宗廣五男　　廣種 宗廣六男
兼廣 廣種嫡男永禄二年因最上義光攻不克和解ス兼廣ニ男ナシ
女二人アリ吉川元綱ノ男力高基ヲ聟トス
高基 吉川元綱ノ子ナリ兼廣后死スニ依テ高基嗣テ領ス
然ルニ義光怨テ軍攻ム時ニ元綱三男楯岡弥十郎頼綱執事ス遂
ニ軍ニ銃丸ニ当リ卒ス其時一族敗走シテ貫見村ニ逃レ共ニ自害家絶ス
右寒河江禅宗澄江寺ノ記録也澄江寺ハ元大江家ノ菩提寺
高基法名 光覺院殿松岩教公大居士　天正十二甲申年閏六月二十八日
楯岡弥十郎 正林寺殿寶光律師大居士
吉川隆廣 松岩寺殿雲林照綱大居士

一 吉川大江家初代ハ寒河江大江家九代時茂ノ五男ニシテ修理
之介備前守大江家廣　二代吉川備前守大江元家　三代
吉川備前守教廣　四代吉川弾正伊豫守頼家　五代吉川
千法師実名頼俊（白岩楯ニ於テ害セラル）　六代八郎五郎兵部
少輔政周　七代彦三郎民部少輔廣政　八代彦太郎兵部
少輔隆時　九代吉川民部少輔大江元綱
十代助次郎修理之介大江隆廣　元綱之二男ナリ

白岩記

一 **白岩城主大江政廣公**

承久合戦の時大江廣元の子に親廣あり義心父ニ背ゆせ始めより上皇を守護し奉る事敗るゝの日逃れて羽州ニ来り寒河江の庄を有つ子孫相伝ニ十八代大江高基公ニ至り山形最上義光に亡さる 親廣より八代ニ至り二百余年大江茂時（或ハ時信）に至り三子白岩三郎政廣白岩を領し城を上の山（陣ケ峰）に築く 白岩城これあり

一 **應仁乱後**

天下麻の如く乱れ其後百余年間諸国豪族戦争止むことなかりき 織豊時代我々出羽国に二大英傑現れ最上義光白鳥十郎これあり 白鳥始め白岩を攻め支族白岩帯刀をして白岩を治めしむ 時ニ白鳥の臣ニ松長右門あり帯刀と善からず依て家之に帯刀を抜め亡ほし己も亦亡ほさる 此の時白岩城主大江備前守廣隆逃れて寒河江に在りしか再び白岩に帰ることを得ざりしが間もなく又最上義光に亡ぼさる

一 **白岩城主大江備前守系図**

大江廣元　大江親廣（承久年間始めて寒河江庄を有つ）親廣より八世茂時（或ハ時信）

茂時の三男白岩三郎政廣（助太郎ト云）白岩を領して備前守と云

二世明代（孫六）三世廣茂（孫太郎）四世満教（白岩八郎四郎備前守）五世満廣（白岩太郎五郎備前守）六世宗廣（太郎四郎）七世廣隆（八郎四郎備前守）

一 **大江備前守廣隆** 天正五年丁丑最上義光の為に亡ぼさる 備前守海味にて松根某に殺さるとあり 間沢村東泉寺に葬る

一 白岩城主大江備前守満教及び満廣を加へ以て五世となせるあり 是れ満教満廣ハ海延村ニ封せられたれハなり されども海延村も一時白岩の領分となりき 亦廣隆公天正甲戌同郡貫見村松田彦二郎宅にて自殺せりと如何にや（甲戌ハ天正二年なり 但天正十二年甲申の誤りか 又廣隆を一本に高廣となせしも如何にや）

一 **白岩城主松根備前守光廣系図**

最上義守の子にして義光の弟なり 後ち庄内の松根ニ移りしより後ち最上家内乱によりて遂に立花飛騨守に預けらる

一 洞興寺 當寺ハ白岩郷第一最大の伽藍にして周防国鳴瀧泰雲寺の末流なり 又當寺に白岩城主大江備前守照基公の位牌あり
横館 當山開基洞興寺殿徳應道賀大居士神儀
年号ハ文正元年なり

八ッ沼合戦岸美作守降参之事

一 天明れハ天正十二年六月 八ッ沼ニ発向に城て岸美作守強盛の若武者以て山形へ属せん近隣を押領し二三百騎にて精兵る寒河江表ニ合戦有と定て此方へも寄せ来る有しと要害を構へ待ぬれハ山形勢押寄城の絆を見渡せは坤の方ハ険阻にして岩石連り西ハ山高く合流し登るに手候なし 乾の方ハ引廻して深き沼有り東ハ最上川岸を流れ艮の隅と南ハ城の際より雑所ニ南大手にして九重折の細道艮ハ搦手なり然れとも是程の小城甚僅にて遂へきかとてはや手の若者我さきに任せ南方より坂中

出て責上り一息ついて鬨を作る城内にも鬨を合せ打
出るかと見ゆる所に大木大石投落しけれハ寄手ハ押にうたさ
れて死する者多く忠を致にて見へけれハ城内より小関嘉
兵衛を始として究竟の若武者に進み出差取引詰め散々に
射立けれハ寄手数多討れけり殊に小城と侮り責具も用意
せざりし故に殊に手負死人多かりけり寄手も詮方なく
一里ばかり東へ引退き五百目の城を向城に構ひ是を責
けるともかりけり されとも小城に日を送るハ臆せるの至りとて
又二十三日責上り 勝負を決せんとて其のめより寄手
此兵思ひ切て二三百挺楯板をつき並へて責上り一息ついて

鯨波を作る城中にも鬨を合せて進み出けれハ寄手ハ敵を
侮り居取く引出しへきとて一度にどつと矢合せ戦ひ
引退けハ城兵気を得て山を下りて相戦ふ能き大将
と覚へしき武者鹿毛なる馬に打乗り味方を下知し向ふ
者ハ立向ひ迎ふる者ハ追討にして人馬を嫌はず切落し殊に
長刀折けれハ討たる人ハ切るものと罵て太刀を振上き
向ふかさし大音にて我こそ當作守ヶ嶋の小関瀬左衛門
名を改め山岸兎内左衛門と申也我と思ふ人ハ掛出て勝
負を決せよと名乗ける 山形勢も勢ひにや恐れけん惣引
して退きぬ義光公御覧してきたなし 味方の者共敵に追

立られていかて付入て城を落取て引返せとて進める所に
に山岸鬼内左衛門と出て進み出るを義光公見玉ひ
天晴の敵やとかけ出玉ふ所に近習の人々勿体なしとて
引留めけれハ扣る袖を引切て一文字に駈寄せ玉ひ
足も鉄の棒にて只一下打当て玉ひけれハ馬ハ小膝を折り
鬼内も続落されしに立向はんとする所を義光公鉄棒にて
のゞ打玉へハ鬼内ハ逃んとしたるを馬より飛下り鬼内を
掴んで引寄せ首捻ち切て振り上玉ふ所へ氏家かけ付以
の外に此手柄にて其首誰に見よとて大将の御身として
は武者か働きに危をとらるゝ事犬死しかるへき基なり

と涙を催しけれハ義光公面目無く思召けん漸く立帰
て本陣へ帰られける近習若者是を取まかせると桂孫左衛門
に大将手を取し戦ひ玉ふ故に旗馬廻りハ申に及ハす諸卒
皆火を吹ほとふして責戦ふ城中の兵引色に見へ多勢を敵
を得めとておひたゝしきさけんで責けれハ散々に追立られ城中
へ落して逃付登る此紛ひのかれなかと透も無く付入しかハ
已に搦手の木戸遂崩たまらす城へ入り将に道を無き
者ハ引きかへ自害するもあり谷底へ落ち重り死するもあり
散々に成り氏家作守氏が小関吉左衛門守二千余人
取て返し防戦し敵を追返して引取り籠り兵を始め

より首尾悪しく夫れハ種々に御詫言申上降参して城を
明け渡し候 然る所不圖嘉右衛門始め働き強かりし者共
四五人召出されて御籠本に取立てられける 義光公此時持玉ふ
鉄の棒ハ後ちとても御身を放さず持玉へ 其後天下一
統の後ち件の棒に少将義光と御志るし玉ひて御蔵
に納宝の一となり

一 八ッ沼之城主原甲斐守山形へ降参一傳八ッ沼城
原甲斐守對義光不利討死法名潔性院殿崇
山元樹大居士永禄八乙丑年　三千石

一 岸美作守其先祖清和源氏木曽先生義賢の
後胤信州ゟ羽州最上東五百川荒宿之館三千石
余領に義光と合戦於和合原三十七人討死を遂
落城美作守法名位牌寺福昌寺に在り石塔に
家老藤田掃部左馬允今井左衛門と有由也

右者最上記と題せし慈恩寺最上院の記録の写しを
以書に出たり

山形勢天童へ発向之事

一 既に寒河江八ツ沼の両楯を責落し威勢強大に成到へ川西ハ大方御手に属し今ハ天童の城主里見修理太夫頼久と申ハ山形へ随ハ不申此武士義光へ属せさる輩ハ押寄責落し由頼久公へ告られハ追付此方へも押寄せ来るへし我小勢を以て多勢に敵対せハ終には責落さるへし然りと以へとも我昔しより下筋八楯の旗頭今義光に膝を屈し随ふへき所謂なし只ハ陣野に晒すとも名を万天下にとゝめん所詮此城を枕として討死之覚悟あり要害堅固にせんと堀を深め水を

湛へ逆茂木引柵を振り籠城の用意をなり為しにける處
に義光公ハ沼より攻降し玉へ猶又天童發向の用
意をなりけるなる時ハ天正十二年八月廿日（一説ニ九月九日トアリ）
大軍を引率して天童へそ押寄る山形より五十余丁に
して立合川と云なり川幅二三十間にして常にハ水流るゝ
ハ膝をぬらさん雨降りぬれハ増る時ハ川幅一二丁に
及びて逆浪立石流まて舟にても渡る事叶ざる所之
處なるに近頃雨降らされハ俄に水かさ増り不思議や水
赤くして血をそゝぐか如し川の向ふには武者数百騎並居て
中にも大将と覚しき褐武者一騎東西に馳廻り下知
をなしける是を見て川を渡らんと云ふ者一人もなし義
光公此由を見玉へ卒尓に渡さは悪しかるへしと下先陣を
引返しそて箭少し射かけて山形へと引取給ひけるか明る日
尾張守を召給ひ此間雨一滴も降らされは水増り殊に血
水流れしは如何にも不思議なる事なり見届返しと宣ふ
畏れそ人を遣し見れハ水一滴も無く河原となる由申上る
然ハ疾く押寄返しと翌早朝より打立て立合川も何なく
天童原へそ押寄せける先陣ハ山と林との間二三丁程
隔て陣を取る城の勢を見渡せハ城より東に十丁程隔
り八幡山とて小山あり其東に沼あり在家の所ハ東の方

腰を廻しても秋田庄内へ往還なり 三方ハ深田に
して寄せ難し 東ハ大手なれとも二騎と並ひて打難
き細道なれハ究竟此要害なり 義光公少勢にて兎角
一當あてゝ虚実を見んと双方鬨を合せて攻戦ふ
城中にも究竟の兵共なれハ手速責落しかたくして
向城を構ひ要害を守り数日責戦ひける然るに山形
勢押寄けれハ東方より霞起り只一片の白雲と成り
城郭を覆ひて見へかたく 城内よりハ数百騎の軍兵
霞の陰より弓鉄炮を揃へ打かゝる寄手引退けハ城兵
皆々山へ登り忽波ひし白雲も東の山へ入る 戦ふ毎に又

霧の如く雲起り彼山へ入れハ数百騎の足音して林藪に
入り夜廻り斥候もなし 戦ふには油断してつめて責崩せて
入りけれハ二三百騎押寄て鬨の声をなけ城中よりも打下り
防き戦ふ処に頼久公の御廟所に佛向寺と云時宗の
寺あり此寺借す 真福寺長松院とて二ヶ寺あり此長松
院鉄阿彌とて脊高く色黒く力量人に勝れ能く長
刀の上手弓ハ養由にもはちん矢疾き 早の手利是を人皆
今武蔵坊とそ呼ひける 寄に延沢城主日野能登守満
尚ハ天童の外孫なる故に諸卒此司を取り数度の戦ひに
彼阿弥坊出れハ能登守城を守り能登守出れは法師

八城を守りけり此人々戦ふ時ハ人なみはなれしかさるたくひなし
義光公怒り給ひ早々雌雄を決すへしとて凡五百騎荒
手を入替へ責戦ふ鉄阿弥坊是を見て寄将く見物
志玉へとて長サ九尺重籐の大弓凡十二指さる大中黒の
矢を負ひ長ヶ七寸に余る馬に打乗進ミ出て大音にて
佛向寺塔頭長松院鉄阿弥字ハ今武蔵坊とて悪
僧此名を取りさる某之勝負を決せんと思ふ者ハ姓名を名乗り
此綱磨ヶ打さる鏃を一ッ参らせんと憎気にそ呼りける
かゝる所に黒き鎧きたる武者逞き馬に打乗り大の山伏
谷をかけ進ミ出て兼て聞及さる今武蔵坊にてましますか

某ハ羽黒山宗徒の中にて悪僧の名を得さる鉄石坊なり悪
僧ヶ冑ハ大和鍛冶きたへさるもの也貴僧の弓勢試え弦走
背通り射られよと仁王立に立さりける鉄阿弥是を聞いさ面
白く侍らんと大の弓に大の箭を打つかひ強く引かさめて切て放
せハ何かはたまるへき鉄石坊ヶ弦走背迄通り血煙り立て倒れに扣へ
し梶原ヵ家五ヶ首の骨まて射通しける城兵共櫓の窓門
共扉をたゝき射たりやしと稀く鳴りもやまさりけり長松院
気を得て差詰引詰め散々に射られハ矢にはゝる数十人
射落し寄手是を見て此入道の箭先にハ鉄の楯をも
叶ふまじと引退く鉄阿弥櫓に登り見渡せハ二陣と覚

ひて入替る今武蔵坊今度ハ打物にて勝負せん能登
殿も何出よとて二人共ニ打出る能登守ハ月毛の馬ニ
打乗り常ニ身を放さぬ五尺壱寸の鉄の棒を持鉄阿弥
ハ大長刀打かたけ二騎打連れ向ふ時ニ寄手方より長
刀を携へ馬ニ乗出大音にて出羽守義光の家子矢
口五市忠清と云者之和尚ハ誰なるを問ふ今武蔵坊と申
悪僧なり見参せんと打てかゝる五市長刀を引提け戦ひしか
双方名を得し上手馬乗違ひ乗廻し戦ひハ敵も味方も軍
を止めて見物す五市か長刀中より折れたれハ是非なく太刀
抜合せ鉄阿弥坊物々しやと馬乗掛て打ハ是も中より
折れにける鉄阿弥是を見て今師匠を討んハ安かれと惜むへき侍
なり只武士ハ打物なくてハ何ともカなせんぞ陣を退られよと云て
暫時馬を休め居り五市是を見て誠に鬼神横道是とや
いふへき情有る入道かなとて引返し義光公の御前へ畏り始
終言上に義光公にも扨もやさしき法師かな汝ハ軍神の
加護有て今日此命を助りけるとて太刀と刀玉りける
五市か後陣ニ続きたる朝比奈左衛門ハ能登守に渡り
合ふ能登守ハ少曽馬上一の達者棒ハ無双の遣ひ手
なり左衛門か持たる長刀打落し小肘を取て引寄せあ
たら兵士是を取らせるとて寄手北中へ投入れ鉄阿弥

に向ひ一揆の助られしを羨しく我も疾くふるまひより
とて築ひたる土居敵味方入乱れ深田縄手も嫌ひ
なく我先にと馳合ひ命惜まず戦ひたる事なれハ大勢
荒手を入替る事なれ城中にハ無勢なれハ不叶して城中
へ追退きたる能登守氏依を見んて本坊ハ城を守
兄玉入来敵を追退けんと例の鉄棒打振り馳出當釋
もなく弓手目手に当るを幸ひ打倒ち氏勢ひ盛なる僻
易して我先にと逃々退く能登守何方迄ものかさしと追
詰く打倒ち打手山形さして引退く能登守猶も追かけ
添山迄も追行事哉と思ひ返し長追して帰る道を遮れ

ある一大事なりと引返しなるか敵より突し馬あれハ腹帯
も切れたるを弓手に鐙踏透しあめ立したる敵西の縄
手へ六七騎逃行く中に只一騎取て返し馬突当せ能
登守の甲此方向丁々と打ちける能登守さすかに鞍
乗をし是を見れハ十六七の若武者なり和殿ハ誰人なり
名乗給ひと云入れハ本間左馬助の嫡子同七郎生年
十七歳と云ひ入れハ能登守莞爾と笑ひ健気なる若
者哉御身の様なる少年討んとて長気なし志やさしけれ
は助るなり和殿の手並いかで及んや早く帰られよ御縁
あらハ重ねて見参せんとて立別れたる七郎も幸ひに引

返し給ふ人ゝ待合居ゆ追付小腕まて能登を討へきと思ひ
ぬるに窮鼠ゝ猫に立向ふか如しと云られハ七郎也て実に我等か小
腕に及たる所を死れとも腹帯を志め出そし其隙ニ腕を
切落しては如何なる大力なれハとて働る叶ふまし其時首を
取へしと思ひしニ腕をつゝめて完尓と笑ひて騒く気色なく
腹帯志め居たる故甲斐ゝ拝切られとも切まされハ残念なり
と云れハ備も剛なる七郎なりと感し給ふ
此本間七郎は文武に達せし人なり　何る時日の歌に
枝なくは折てしるものを花の江戸を
かくれなくそ住のなん

扨も義光公日を重ねて責戦ふといへとも勝利もなく只
士卒を痛むるのミなる故ニ山形へ帰陣なされたるか義光公
尾張守に宣ひ給ひけるは思ひの外城中大勢か楯籠り又奇怪の
事共多し　押寄れハ東の山より霧棚引城をおほふと見られ
ハ一片の白雲となりて城を隠なす白雲の中ニ軍勢数多打
出る故め　押寄し時立谷川の軍配如何様不思議の術を行
ふ者あらん寳幢寺を呼出し評議せん　殊に能登守ハ知勇
勝れし侍味方に為になるものと宣ひハ尾張守承りて寳幢寺
へ使者を遣し給ふ其時の住僧尊海法印則登城しけるハ
義光公宣ひけるハ此の頃天童へ押寄せしに城中奇怪の

事ども有り又罰ある者多く何卒罰成者共手にのかれな
よし語られければ当山中上人之れハ老太郎狐の所為なるべし
と申されけれバ直に法印下其筆にハ恐敵退散変化退治
の法を修せしめ玉ひと当山中上人是ハ何より難義なる御
旋にハ僧侶ハ祖師の教に任せ天下泰平国土安穏武運
長久息災延命を祈る外無し然れども当命ハ背
きかさしと領掌し玉ふ義光公喜悦有て手から地蔵尊
を取出し玉ふ是ハ我常に信しまする如の尊像なり是を仲
当に安置し奉り護摩修行有之候へしと当山に預けら当山
彼の尊像を守り奉り帰りて一所を清め四面に檀を飾り

中尊に将軍地蔵摩利支天を遂に据え立華にハ常に花
飯米に山椒柘榴焼香にハ毒蛇の骨供具に革の飯を盛り
灯火にハ宮守（イモリ）の油閼伽に白蛇の水を添れ飯食日々に
替て調伏の法を修なされしかりしことも成り給ふ二七日
子の刻に至て御祈成就と申上ければ義光公御喜悦不斜
重て御礼申さんと有りければ当山中上人ハ夕庚御殿へ向ひなる時
例の術を顕しても來の方紫の雲棚引わたり来らば前の
如く奇怪を振舞ともかもはやしみ玉ふな爲なたと申上奉る

# 喜太郎狐之事

一 往昔天童城主里見家ニ京都御用の義ニ付喜太郎
と云者を登せらる 時ニ奥州信夫郡より一人の旅人
喜太郎に向ひ同道いたし度よしと云ふて彼者問ひけるハ
ハ御身ハ何方より何国へ御通り候やといふニ喜太郎我ハ羽
州最上より京都へ御用ニて登るなりといふ 彼者某も京都
へ始めて登るものなり万事御心添頼入といひけれハ喜太郎
夫ハ何用ニて登りたまふと問ひけれハ彼者道中御世話に
成り何をか隠し申へき我も稲荷ニ住む野狐ニて名を
左近と申 我等か本地京都藤の森社稲荷大明神之
此社へ集りを語りけれハ喜太郎扨ハいか成御用ニやと云ふ 我等
の如きも術道の功を積て階上に進ミ免状を頂き方便
の力にて秘術を行ひ自由自在の徳を得ると委細に語り
たる道中に犬なと御防き給へと頼ミけれハ喜太郎も殊に思ひ
所存を語るうへハ 互易く思ひよと同道して京都ニ着け
れハ喜太郎か旅宿へ同宿して喜太郎主人の御用相済し
左近と打連れ稲荷の社へ参詣して社檀へ神楽奏しけれ
ハ衣冠正しき白髪の老翁立出玉へ遥々遠国より登りたる条
神妙なり先門外の鳥居三度飛越へしと仰有けれハ左
近謹ミ門外へ出て左近ハ難なく飛越へたり喜太郎思ふに

扨も不思議なり我も狐の真似して免状を詐術を行ひ人
を誑して見んと思ひ着たる策をくらくと急き鳥居を迄
投銀し二人共連れ社殿へ上り此由を申されハ内陣より童
子二人立出一人ハ三方ニ土器一人ハ白銀の銚子持出
る左近ハ喜太郎ニ式臺して土器を取上け三度戴き詠さるを
見れハ熟柿の白酒なり三献うけて座に直ル童子是を内陣
へ持行又持出喜太郎か前ニ置喜太郎思ふるハ是を呑むは
赦免の状を得る事成るまし是を呑て兎も角も成るへきと
土器を三度戴き呑ここちよけに味ひ甘露の如し是義なく三献
呑ける童子土器を内陣へ持行少時有て老翁立出迄へ

是ハ赦免の状とて弾蕾の様なる物を長サ五寸程ニ折曲ケ結ひ
かふけたる物と手の中へ握る程の水晶の如き珠を如意宝珠
と名付此二品を下さる二人頂戴して立帰りなる此如意宝
珠ハ縦ハいか成る者にも身を変せんと思ふ時ハ宝珠をくえ
其身にて観念されハ神妙不思議の方便有り扨喜太郎か
姿狐と見へしも宝珠をくえ観念されハ女の姿となりて
旅宿へ帰り御用相済て左近と共ニ帰国し喜太郎天童
へ帰りて始終語られ申上されハ是ハ希代の事なり然らハ此城の
守護神と成るへしとて社領を寄進ありて子孫繁栄して代々
守護しけるなり依て此處御加勢いたしけり

日野能登守降参并勇力之事

一 延澤城主日野能登守満尚ハ天童の旗下なる故に
此度山形より押寄ると聞て一族を引具して天童城
へ馳来る 満尚ハ人に勝れし智勇兼士なり 家の子に有
路但馬笹原石見とて両人是も常ならぬ者有り 抑
山形に昔し八幡太郎義家奥州征伐の砌鳥海
山の両所を勧請しなさる両所宮を後金賣吉次
か修造せし宮有り 此社内に大なる釣鐘あり 或時能
登守人々と共にそこに遊ぶ 人々申けるハ 能登殿いかに
大力なれバとて此鐘を自由になされんやと云ふ 能登守
聞て我一人して持なバ此諸鐘ハ与へきやと云ふ 人々いふまでも
子細なしと云へハ それハさらハ見給ひとて 鐘に両手を
かけて安々と引落し肩にかけて鐘ごと何語もなく立去
しぞ 則ち能登守か領内露ノ子と云所へ持行て古
寺にある物に掛り有たりし程也 大力比人なり 依て
数度の戦に抜群の名誉を義光公もかねて尾張守に
宣ひたるは能登守をはかり見るへしと仰らる 尾張
守承り一通を認め義光公の起請状を相添へ急き使
者を遣しける 使者能登守に対面して一封を差出せし
満尚是を披見して忽ち心を定るなへし 弓矢の冥加

なくては争ふ各務の御志筆に誘ふべきや今迄の好身
を去て山形に属するは武士の義理に叶ひ頼久公も
嘆かし恨むべけれとも情止むるを得すと思ひきつて山形
へ来るべき由返状に及ひ子息并一門を人質として山
形へ遣し其程能登守天童を去て山形へ属しけり
能登守義光公へ面目見得致し悦ひ至へて従ひけれは
頼久も其落の猛勢を見て恐れ入し我に属するものなれは
何の気乱有へきと宣ひけるに満尚申けるは頼久当日より
左様の義思ひもよらぬと申上けれは其義なれは是非も
無しとのことなり又義光公尾張守に宣ひける天童方の

強なる者共随分はかりと承りしと尾張守申て色々
方便をめくらしけれは天童方の家老其外郷下共方の
内藤生伯耆守東根常陸守家老里見源右衛門
楯岡安房守草刈志摩守其外寺相模守何れも
貪欲に迷ひ義理を忘れ忽ちに心変しに皆々義光公
へ属したり是より頼久公の御運も次第に衰へける

一　義光物語ニ云天正十八年北条の一族御誅罰の時太
閤秀吉公小田原へ御発向の砌義光出向ひありて御陣
到京都へ登り給ひハ御喜悦不浅して則於御前羽柴
出羽の侍従と成されける其節能登守も義光の御供致し
翌年天正十九年三月廿七日京都ニ而病死ス能登
子息又五郎延沢宮内と申ハ父の後ヲ遠江守光昌と名
乗最上落居の時加藤肥後守の御預りニ成る

## 山形勢天童の城に押寄る事

一さる程に義光公諸軍へ觸をなし先陣には新関因幡
守長谷堂式部少輔飯田播磨守日野能登守を始
として兵卒五百余騎後陣は氏家尾張守大将とし
て奥村常陸守大久保主馬助高橋遠江守志村九
郎兵衛白田並忠左衛門を始めとして兵卒七百余騎既に
山形を打立て宝幢寺并法花寺下は東の河原に出
足へ香華を備ひを日頃の刻過行ひさいなみを
今は花立河原と呼ぶ去川先陣立谷川に着けるに
折節立谷川幅一丁余に水増り血水流れ天童方
より数百騎馳出川岸に充満して矢先を揃へ川
渡らは射殺さんと待かけたり其中に母衣掛武者一騎東
西に下知をなしたる體にたかはた東の方より紫雲
棚引と見えしか其時は暮来て見得しけなれは数多の
犬を先にはしらせ鉄炮の筒先揃へて打払先母衣
武者を矢口五市追さん打払して狩ひたりし
て打たるに何やまさん馬よりまさかさまに落ける
か其使起ありて尾を引ぎり東の方に草むらに逃
るを見れは古狐と成りてかけ入ぬ数百挺の鉄炮火一度に打
かくれは山野に響きて震動し川向には数百の軍勢と見

へしも狐と敗り古狐子狐数百是散々に敗り逃るも有り
打れて死するも有り手負て逃るも有り洪水ハ跡かたも
なく河原となり雲も霞も消失ければ寄手ハ小踊りして
押寄城に着ければ向陣を取て人馬の息を休めにけり
今度ハ初に遠ひ城にハ白雲もかゝらぬ勢も見へ怪
しき事もなかりけり軍ハ明日卯剋と相定め勇みいさんで
待居けりさる程に天意にてハ能登守山取に篭しける
手隠れなりければいかなる天魔のみいりしやらん勢り衰ける
るとて力を落し頼久公申されて偏に我が運命の
末なりとて敵押寄ならは一軍いさぎよくして討死せん

若城中に能登守に一味の者もあらハ我が首を取るべし
又志有る人ハ主従の好身深く思ひて何年義光父
子ハ首を取て後世菩提を弔ひなひともろ細けに宣
ひは長松院殿御孫進に出ては口惜き御諚哉近族
の中に能登守が様なる貪欲不義の者に順ふものあらむ
らん吾等が落んと思ふ人ハ少もなし出登しと座
中を見回し今度の先手こそ能登守なるべし縦令鬼神
にもせよ目にもの見せんものをハ遺恨を晴しまさんと
さも潔くそ云ければ城中皆いさぎよく必死と
思ひ定め櫓かきに矢挟を用き只射取れぞ明

日比軍とて侍居ける

一 此城往古ハ尾羽脊山と云 二代頼泰此山に城を築きて尾羽脊ケ城と号ス 先祖頼直公ハ成生の座ス居城也

## 天童落城之事

一 天童城主里見家は人皇七十代後冷泉院御宇大納言藤原兼房十代の孫右京大夫兼伊豫守藤原頼直公奥羽按察使四位中将ニ任是先祖也
二代嫡子四位伊豫守頼泰三代四位下頼房四代五位上建三郎直孝五代四位左京大夫頼孝六代四位下伊豫守直儀 七代五位上式部大夫頼隆八代四位伊豫守頼綱九代四位左京大夫頼利十代四位伊豫守頼良十一代四位左衛門尉頼次又頼貞十二代四位上修理大夫頼久 是迄十二代 居城暦数三百有五年を經されたり 頼久公十二歳の時御父頼貞公今を限りと御悩の時 山形義光公は頼久公の姉聟なれハ義光公を召され 仰られけるハ頼久いまた幼少なれハ成長のうち万事貴方に頼ミ入るよし仰られて速に逝去しまふ 頼て義光ハ頼久公の御姉聟と

中々れとも貪欲ふかく盛んにてやゝもすれハ天童を
押領せんとの思ひ有り云によつて宮の成就院宗
野東岑院寶幢寺等に非道の祈禱を仰付らる
是ハ天童落城の御祈禱なりける因茲寶幢寺
東岑院忽御請申されけれ頃も天正十二年三月非道
の祈りを執行ひける時成就院ハ虚病をかまへ御請
不申如何なる子細と云に天童里見家は代々の主君にて
ましまし故そのおそれ有りを義光少しも許しかたく憎き僧な
りとて最上庄内の境仙人沢ニ於て同く三月廿八日なさ
けなくも殺害し玉ふ此旨かくれなく天童頼久公も少
しめし給も義光ハ猶悪逆無道此振舞前代未聞の
事かなと思召玉へはより山形と天童の中ハ不快と成り
既に不和に依て年月を移されし同年九月九日ハ義
光公天童へ押寄せ玉ふ同く十月九日再ひ義光公
大勢を引率し天童へ発向有り東口大手は大将
ハ氏家尾張守坂上紀伊守志村九郎兵衛貴か
将西口の大将ハ長尾源右衛門長谷川出雲守志村
九左衛門先として関をつくる天童にも兼て期しける事
なれハ先手にハ蔵増安房守草苅志摩守奥村大
膳鈴木半助直江五左衛門矢口七郎大勢にて押出

西楯末葉五十六坊馬京六拾八騎故合六百九十六
人此度ハ必死の合戦と思ひ定め少しも臆せず打
向ふ佛向寺表門の大将ハ重阿彌坊徳阿彌坊伊
藤右近高田藤右衛門理右京寺内の僧俗されも
くと切て出て散く戦ひける中にも長松院が手に究
竟の者十七人射て落す二番ハ長谷川出雲守と名
乗りて味方の首九ツ取て四方に立処をよつ引放矢
に長谷川かたて中を射通されて落て死しけり
宥に藤増安房守か手に金子七郎とて是もよき首
五ツ取て勝ち乗て切入る処を光照院是に有りとて打長

刀に金子ハ落花と成り猶も不ず長崎式部が家来
岡野七内と名乗り首六ツ手に持四方の敵を管照院
長刀をのべなぎられハ何かハ以てたまるべき車切に薙けり
山形騒是を見て命もをしまず戦ふ処を長松院鉄棒
打ふりまわる散々に面もふらず割て入りばらりく
と打伏せられハ只乞と見る究竟の兵四十七人打殺す
寄手進んで入かれハ寄手是に辟易し久保田北方へ行く
然を雲鶴屋敷より梅津釆女津田主水石田右京堀大助
柴田松之助湯村宗内高橋惣助蜂谷作内押野年之
助佐藤松之助我もくと追かけく戦ひける処に西楯

より笹木織部大将にて我おとらしと欠向ふ中楯ハ安西
刑部大夫監物先として大勢共ハちくらに切て出れハ山形
勢ハちらくにして神町口へ引退く天童方より土屋勘兵
松田右馬那須蔵人南楯の大将にハ八森石見守
阿部土佐守小畑大隅守先手にハ木村雅楽にて小笠原
蔵之丞浅野勘之丞玉川助蔵小笠原助御楯より
も走り出て一騎も遁さしと責かゝりけれハ山形勢
今ハ叶ふまじと思ひけん一度にどつと退きける中より
渡部又内と名乗て味方北勢に切てかゝる八森石見守
家来小関孝之助生年六十四歳日頃隠れ無
き者なりしか雅楽丞の幸ひと又内ト渡り合互をはれと戦
ひしか小関ハ名ある者といへとも老武者の事なれハ是もたゆ
しと成る所を又内すかさす打太刀に首ハ前へ落に
けり又内打取る首数六ッ引提け引返さんとする所に石見守
家老孝兵衛を討せ無念や思ひけん生年十六歳八森
右見守嫡子かゝりのかさしとかけ寄る所に是も味方北
兵の笹木源之丞か放ち矢にあやまされ又内か首胃
に立しと当る痛手なれハ終におこらハまろひ落る石見守
笹木織部首打落は山形の軍大将をハ安人共ハ長松院
働の残様まて打ちしく是を見て山形勢進を兼ねて

を見へける去程に東口には山縣の先手に赤羽根掃部左馬
江口玄馬武久庄之助原八郎長門守本庄
四郎左衛門里見勘解由江俣治郎後詰には氏家尾
張守坂上紀伊守志村九郎兵衛軍大将として大勢
此兵我もくと切て入る中にも横田大膳と名乗て義光
方にかくれ無き者なり天童方には片桐市之丞渡り合散
く戦ひしが大膳何とかしたりけん市之丞が太刀を請は
づし首打落さる所に山縣方里見勘解由と名乗て
切てかゝる小玉助右衛門渡り合と切結ぶ小玉には流石兄
武者故終に勘解由に討れたり石黒玄蕃是を見て目

此前に小玉をうたせてやすからず思ひ勘解由を引くむと思ふ
候ふ押付まくり付火花を散らして戦ひしが石黒玄蕃
此度ひまりて玄蕃が首にかゝり三途の瀬ふみせよやとて玄
蕃向二つに切割り里見がたまには首八つ打取陣に引て入る其
次に細矢近内と名乗る太刀引提け欠出る相に味方
より五位治郎助と名乗り生年十七歳になりけるが細矢
にむざと渡り合を見れと切結ぶ細矢は聞へたる剛の者次
郎助は討れにけり湯村和泉守是を見ていさましく細
矢殿無と打太刀に細矢が首水もたまらず切落し
切先にさしつらぬき山縣に隠れ無き細矢を湯村が討取

なり我と思はん人々ハかゝれ〳〵と高言し味方陣へ帰りけると
引かゝりけり生年二十歳数度の高名誉ありしもの也けれは
りたる山形勢是を見てあはれや能き敵よ逃しはしとて
追懸けるか寄に三瓶六郎と云者湯村を討せては
叶ふましとてかけ出て働きたる処に山形方熊沢
甚之丞と名乗り是も名有る兵首数多く取て誉れ
能き敵もかなと思ふ処に三瓶六郎を見て満る首
も目かけさりけり一文字に切てかゝる処に三瓶大力の勇
士にて熊沢を打取り甚之丞か首六つ取り引返せ
処に寄手より安孫子左近と名乗りて切て出る味方にハ
梅津左門出て合戦を最後と切結ふ左近手負ひ引ける
所に又梅津か首を打取りけり又味方より瀧口久太郎
と名乗りて出る処へ寄手より畑谷源之丞深く働き合ふ
戦ひしか源之丞か太刀鍔元より折れけれハ無二無三
に組て勝負を決せんとせしか久太郎源之丞を組伏せて
首かゝんとせし処に源之丞石流の者なれは下より差添
抜き柄も拳も通れと突通しけれはこらへす死にけり山形
勢に隠れなき勝田勘左衛門切て入る処に早坂新八欠合
て戦ひしか早坂か太刀中より折れしかは勝田はやかて
新八か首取り勇みいさむ処を阿部土佐強弓にて勘左

馬を目の前に射落しけれハ其手足をなへてゆきまよふと
我もくと追かけたる其中に平木市之丞と云者首数
多く取り勇をふるふ事に味方より佐藤武右衛門と名乗て
市之丞か甲二ツに切割たる手並を見て佐藤道也
亦打取れとそ桜井兵助走り寄り掛るを佐藤ハ大力の剛の
者にて桜井か首を打落し是迄に首数十四ツ取て帰陣へ
引返せしを我か手に志村九郎右衛門かけ寄て石坂川内
と云者九郎右衛門に負ふさかりて戦ひしか佐藤か太刀遅際
より折れたれハいさ組んと金剛力を出し手に押つおさ
れつおいらく組合ひしか佐藤か力まさりたれ石坂を組ふせ

首かき落し立所ろを志村九郎右衛門走寄り佐藤武
右衛門を差通したる佐藤ハ生年五十二歳石坂ハ廿五歳互
にこそハ死ケり 坂上紀伊守か下知として大沼三助を後
和泉助前田小次郎先として利本木清水御本陣へ切て入
味方北陣よりも森八郎清理七内後藤小四郎山口市助
塩理勘兵衛中村彦七村山勘十郎ホ出合さんくに切立る
後理ハ内山ありしハ捨て打込しく前田小次郎ともまる
都合二十四人討取頼久公是を御覧し御悦び限りなし其
勢ひに勇を得てなりて引かまりける程に東口へハ延沢能登
守里見源左衛門外南相模守安食大和守鮭沢兵助を

始として義光方に敬りていよりなる天童よりハ横山備後守
佐藤左馬ノ千葉ノ源八郎和田太郎吉冨沢右京松浦
外記渋谷頼母小山源助大森又内結城八郎渡邊
近内八ツ七郎大林七内栗原角助戸嶋彦八我
おとらしと数く戦ふ中にも和田太郎吉外南相模守ヵ首を
打取深入して能登守ヵ家来有路花人に出合数くに戦ひ
和田運命やつきたりん少し足之踏違ひたおれしところ和
を有路ふかさん首をとらんとする所ニ里見源右衛門郎等に奥
山惣助と名乗て切て出る所へ味方より戸部彦助かけ合
切結ふ所に奥山何者なりしん馬上の堀に片足踏込

立あがらんとせし所に彦助追付て組付首を取らんとする所に
奥山ヵ持たる太刀をはなさんとせし処に有路いかりの如くにかけ
来り上なる彦助ヵ首水もたまらず打落す草苅兵庫是
を見て有路をのがさじとおつかけふより早く有路を唯一下打に打
ころし此首を云捨六人打取て猶も草苅高声に云様ハ下
情此んめり此侍共一旦の欲に嫉けり只今遁れ悦ひて
ても昔しも今も道を失ふ天命首をも廻らさず面かはれ
と大音声に呼わりて本陣にて引返す處に日野能
登守ハ大力世にしれ古今無双の者成れとも忽ちに
疲れ義光に随ひ味方此者共数度の戦ひに出てされ共

草苅ヶ少し油断の所を見すかし例の鉄棒にて阡時に林
七人打ころしく此勢に味方の勢気を失ひ毗沙門堂へ引
てのる跡に成生伯耆守家老大友兵庫進若狭
鈴木彦右衛門大勢にて後引返し天童の本城へ火を
かけ兼れハ伯耆守直に御許へかけのり系図等を持来
して義光の御目に懸けれハ御喜悦限りなし其時御
上下の輔も灰塵と成り余煙あまく所々一度に焼
兼れハ流石にたけき味方の勢今は是迄なりと力及ハん
備ハ何なりと討死せんと大泉内蔵助湯村近江守五
十嵐隼人土屋長門守神彦左衛門佐彦将監先

として家光の人々切先を揃へ義光の本陣を目かけ面
も振らず切て入命を塵埃と戦ひけり此人々ハ打取り
たる首二千五級此勢ひに義光も少し此若共も働き
にハ如何成る鉄壁城も叶ふまじ猶々此陣引兼て
松木清水の陣中へ引返し玉ふ然る処に増屋庄左衛門
山田五郎右衛門布施弾助三人ハ義光の籏元を目懸け切て
入三人の打取所の首数八つ迄討取庄左衛門ハ終き敵に
切て落し深入して坂上紀伊守の手に懸り討死せり大泉
内蔵助ハ志村九郎兵衛ヶ切先にかかりけり五十嵐隼人は
坂上紀伊守ヶ手にかかり討れけり其内に城中ハ残らず煙と

なりけれバさしも北頼久公も今ハ是迄なりとて生年十七歳
にて奥州さして落ちたまふ先キハ兵庫頭跡ハ湯村近江
守御供して踏り多き雪なからも主従の人々落行きたまふ
其日いかなる日なるや天正十二年十月十日ことの外大雪
梨木清水より出たまひし所ニ其日兆午北時より雪降り
けれとも京都大佛を御通りの時ハ雪もはれけれハ程なく
嵯山へ御着あり是までハ兵卒二百人余なり奥州への御
供てハ以上十九人にて離きたまふ余外ハ御返しなされたり
右軍中此時西楯の寺より御所への御使僧も出へられ敵
兵も押寄せ寺々火をかけれハ大門中門七堂伽藍一度に燃
ばかり無地堂七観音空世堂御霊屋寺々残らす焼失せり
然るに加木森之助といふ者火をかけけれハ其焼煙り森之助
か口へ入り忽ちに気塞りて死したりし見るものごとにあはれ佛
陀の御罰とぞ諸人舌をまきにけり去る間西楯より御所への
使僧専阿弥坊ハ増田掃部前にて生捕られ守阿弥坊は
伊豆左馬助か前にて生捕らる安儀を嚴敷いましめ兵卒
数多ありて山形差して行処を落人とも是を見てにくき敵の
振舞かなとて木口平七幸保次郎高沢平八今井勘之烝
今田孫之丞篠原孫市東海林孫助桜井善七須賀又市
井上留七山田惣之丞和田小七郎柏倉庄之丞森谷市助

落合平四郎 星彦蔵 松田甚七 吉田市右衛門ホ我もくと走りよ
り元来落人の事なれハ多をいさけれ散々に切ちらされ夜に小
松山城守 湯村和泉守 安部土佐守 安孫 禰能 星王寺は
立石寺へ色さし落行ける此由を聞よりも色めき彼ホ手し
取て返し山形勢を一人も逃さしと多くに呼はりけれハ友備
此言葉ハ力を得て日頃強力の覚へ有けれハ敵のかたいに其
若ハ味方も中へ加わり散々に戦ひけり 右其奈人の勢共を
筆に討れ長井又市 三浦兵蔵 大沼八郎の三人漸く
逃け延ひ山形さして引退きける 山寺の土民共申けるは
此事又山形へ聞へなを定めて穿議きまふべし早く岩窟
に御忍ひましませと皆くすゝめけれハ山岩穴へ忍ひ隠れける 此寺の堂
右三人の者共義光へ申上けれハ則時日を移さす大勢山
寺へ趣き穿儀強けれとも落人更に見へさりける 是に
よつて山寺の土民共に申けるハ定て落人此者共に忍ひ居
為しすへし早く取出すへしと せめけれハ 土民共申様此事更に
落人一人も見へ不申候と申けれハ山形
勢実とも思ひ重て取ぬべき事もなく山形へ帰りける
其先き天童の落人九人ハ爰彼ホにて討死し小松山城守
湯村和泉守 阿部土佐守 安孫 禰能ホと 東阿弥坊守 阿
弥坊の六人ハ学頭へ落着き其外の落人ハ八王寺別当へ落

着者もあり竜光坊銀蔵坊へ落着もあり守教寺へ落行
ものもありけり其外落山大膳土屋市正并落松之助布
施弥助山田勘兵衛等主従共十六人慈恩寺を心さし山
形を見合一戦没しへき所存にて海延の渡より急き舟ニ打
乗らる処ニ皆々運命やつきたりけん舟路かち北取根や回し
かりけん殊に小舟の事なれハ回やまつて最上川の早瀬ヘ
乗かへり十六人舟路共皆々空しく成にけり此由を蔵
増安房守く誰く名ハ名有者共なれハとて死骸を皆く
取揚ケ同しく十月十日蔵増か取立たり
寛文に畠山亀之助と云者伯耆守か孫なれとも十四歳の時御

楯屋鋪焼煙と成るを見て亀之助家老ニ武田伊賀矢
野勘兵衛平塚久内等を始めとして大勢を引具し義光
へうらみ申さんとて切て入り戦く戦ひけるか畠山亀之助
心ハたけく思ひとも若輩にしてまくそのもなけれは
終に打死せられけるをおしまぬものハなかりけり　水口主水
須貝與兵衛石塚又八菅野杢之助楯岸七郎兵衛岩
松寺別当氏家治部一家に切てかかれハ義光の一門に
義勝ニ叶ふ人なり治部と渡合戦ひしか治部運や
尽にけん義勝の手にかかり生年十八歳にて討れけり綿
打亀之助家老伊賀是をみて目前に味方を打せた

と思ひ斗て如る義備も頼よりと互に請へ　むふきらり戦
ひしか伊賀ヶ斗大夕に義備の首を打落しける
右等の次第後ち此多めに書きるし調られと山寺学頭
所望こありられども唯今ハ中くかなひかくし　四方静かならさ
りしかは此義先ありぬらハ後日書記し調られと殊に佛向
寺是迄此有縁起ともに懇望なされしかハ多傳異儀に
及ふ是此度此御厚恩報志りしに和尚へも何孫助も進
上可致ぞ時節を見て則ち西傳大石田へ忍ひ行て佛
向寺和尚に山寺学頭の所望此段つぶさに申上られハ和尚
も学頭の西傳を痛り思ふ由申され扨も過分の次第

或ハまれ一度ハ君を御代に出し奉り万年当面に御意
を得度とそ宣ひける
扨甚先佛向寺長松院を召れ其方奥州に罷越し
君の御行衛承り申へしと仰られ依て長松院奥
州利府に参り君の御行衛承るに無覚束事存はなし
忍ひ参り御国中せし所武蔵守聞て長松院を
請し頼久　公に申上られハ頼久公長松院に御対面
有りて跡にしや長松院跡に残りし者ハいかにと御尋
阿弥(?)長松院申上るハ萩山大膳土屋市正新发杢之
助右是非に今一軍と心にかけ氣(?)もまり川慈恩寺へ落

引くかは海延の渡りにて不意に相果しけり又島山亀
之助并死若松寺別当并死のことを具に物語申
上られハ君も聞召し甚歎ましくて御落涙有り暫く有て
頼久公宣ふは湯村近江守もあやしき原迫我か供せ
しかとも同十一日に終に死去しぬ是ハ戦場にて浅手
深手数ヶ所の疵にあやまたれハ不便と云もはまり
なりとて泪をなかさせ玉ひけれハ武蔵守も共に泪を流しける
扨天童落城の跡をハ内々成生伯耆守に下され宜ふ
云へとも義光思召にハ伯耆守ハ代々の家老なりけれ共
普代の主を捨て心変りせし者とて忽ち御約束に違ひ

落城の跡にハ愛宕堂建立有る由きとて終に跡式下
されて剰へ病気色ありし命はかりハ助けおかるとて改易
被仰由長松院言上しけれハ君斜ならす思召さる
扨又西楯佛向寺は根子を御頼に依て長松院申上にて
御本尊瑞膺石釈尊の御舎利水晶珠に籠し置赤
旃檀のこそきて蓮花并ニ深大地村雲の判五鈷三鈷
鈴大唐より渡りとる伎一向の鐘の緒繪讃并ニ掛物四十幅
入の箱什物入の皮籠壱ツ是ハ落城の砌山形へ引取る
釋尊涅槃記と中将姫の名号紙上五幅是ハ寒河江の
林阿の所より御綸旨并ニ箱縁起五巻の箱縫目合し此衣

と結び袈裟是ハ花増院の菩提所の弟子共ハ金地
の箱香入と云ッ結の志やくし是も彼寺ニ入て山形へ引
取たり残る什物計り和尚の御供仕り薬師堂へ落着
仕度候し処に志村九郎兵衛新関因幡并荒九郎兵衛
大勢にて押寄たる故取物も取あへず僧俗共に四方へ散り
くに逃たる様に庭并所ぞ悪く焼たれハ前後を失ひ
大石田へ越きくの鉢も持ちたる家何くとも鳥五七羽飛
来りたる程なく百羽計り飛出し和尚も不思議ニ思
召し鳥次第に出たれハ北口比垣葉石通へ出玉へ若木を
通て赤根比源氏坂を下り貴船明神若宮八幡迄ハ鳥

八九羽見へたれども六月坂江通りの時ハかれども一羽も見へず
やらし猶居の時宗寺にて暫く休ミ玉ひし所什物計り
だる坊主共も一人も来らず夫より猶居北寺を御立出なさ
れ飯田村の時宗寺にて彼の坊主共を御待なされども
什物計る僧共も見へされハ力なくして大石田村の
西光寺に落着せ玉ふと言上志されハ君聞召て御詞には
花増院の安房守の如何有るそときゝ義光帰陣已
後早速安房守山形へ出仕候処ニ義光宣ひ候ハ
余の者と違ひ其方ハ大童子一族なれハ押能可尽者
なれとも一旦約せし言葉なれハ小国八千石を其方并子息

日向守に下し置其方ハ日向守に成候様との事あり橋
小田の城主橋津守ハ世に隠れなき天竜普代の侍にて
義光の手に入らぬものそ則天正十二年十月十六日に橋
津守を責落したるを其跡并増日向守に被下置といへ
と如何成る宿意ありてか義光の旗下に入らさるそ程なく
山形より責落されて奥州へ落行たり其跡ハ常陸守
家老里見源右衛門ニ被下則改て里見薩摩守と号す
夜に頼久公を一度御代ニ出し奉らんとの内談ニ依て時分
正月中旬に大石田より専阿弥坊守阿弥坊の両僧と日野
右京押地 五百人衆にて名高き刹府へ此由を申上られハ

頼久公御ワれ実に立石寺坊中一身いたし山口村浅岡
大炊之助河原期村瀧口兵部両尾張まで猪野村
此山奥へ忍ひ立石寺大勢隠し置東山村の時宗寺乃
分ハ小勢なりといへ共長松院を忍はせ置長松院と并荒
兵庫両人を大将と定め若し山形勢押来らは先手の
精兵打て出て切崩しへしと内談あり大僧宮城玉分
名取其外諸将にかくらひ評定ありて頼久公両僧を召され
夫ハ名高き出羽へ立帰り此由和尚へも密に物語いたせと
御暇下されて両僧大石田に帰り始終を和尚へ申上られ
上人も御悦ひなされ急度兄弟に遣して頼したる事あれは

屋敷を厳重に構へ武器を磨きて居たりける
所に頼久公の運のきはまるにや此度両楯の内
より忍び者有りて山形へ内通せしかハ義光卿召し
捕りて時をうつさす大勢さし向け両屋敷を
とりまきて責立けれハ両屋敷の者共百餘人討れて
寄手も百八拾余人討れにける大炊ノ助も兵部も
乱れたけくおもひとしか大勢といひ要害ともかなはされ
ハ終に責落され無念といふもあまりあり　山寺の
宗耶寺と慈光坊の両僧　一味の由山形へ聞へけれは
急き彼の僧を召捕るへしとの事なれハ両僧ハ取物
も取あへす行方志れす落行たる　山口村河原子村両屋
敷の一戦に及ひしハ天正十二年酉二月十日の事なり　此事
大石田より使僧を以て　頼久公へ申上けれハ君少し
御れ此うへハ力なし　頼久ヵ運命尽し所なりと
宣ひけれハ使僧も大石田へ帰りて上人も袂をしほり
玉ひける
扨内ニハ義光公信せられける　佛向寺ハ代々成生より此
菩提所なれハ戦僧の働き今更以て　苦しからすと
知行什物共ニ上人方へ返し置しそ悉く御返しありける
其後山寺学頭より日頃所望有る五年の縁起の事

上人に申上られハ今ハ散阿弥行方去れに殊更艶色
の時まで佛法王法も兼へなし武威ハ佛向寺悉く
焼ぶれ給ハ末世此為に日頃両僧か覚の通り委しく
書認め學所へ進し申度しと宣ひて則立石寺へ
両僧を差されて　如斯書記し畢

天正十三年乙酉三月二日　専阿弥判

守阿弥判

山寺
寶珠山立石寺

一　此度天童落城の戦ひに討るゝ者都合九百三拾余人手
負八百人也　氏家尾張守より義光公へ注進ありければ
斜ならず悦び玉ひ先新関因幡守　貞村常陸守両將
に兵卒二百余騎相添天童城を守らしめ玉ふ　山形へ帰陣
有りけるついに又天童西楯時宗佛向寺ハ頼久公代々
御位牌所にて寺千石の寺領附置る所を一圓取上げ玉ひ
山形寶幢寺へ附られける　義光公宣ひけるハ　いかにも当海内
を領り玉ふし　地蔵菩薩を天童城跡に堂を建立して安
置しまゐり　当地の守護神と崇めんと宣ひければ　当
院有りがたき御諚かなと思召の通りなれハ　此度の御

勝利天理に叶ふを旅よ早く思ひ立ちける座しぞ其
年より天童城跡に三間四面の堂を建立有て翌
年六月に戦死の者ども為に大般若経転読供養
有て一七日ども護摩修行致され同六月廿四日地蔵菩
薩を安置し鎮守愛宕権現と仰ぎ奉りける
則山號寳幢寺なる別當をおかれたるあり

## 山寺立石寺退散之事

山寺と申ハ人皇五十六代清和天皇の勅願にして貞観年
中天台慈覚大師の開基にして玉ふ山なり東ハ奥州境西ハ
最上川を境南ハ天童小路境（今山形の家中の内也）北ハ鬼塚境く
（鬼塚今出中田村ノ近所ニアリ）如斯支配ありと大師の奥書記に見へて
これども川北乱世の時にかたんく没収せられしや其實記
知る人なし去ぬる頃に天童落城に付落人之徒を隠し置き
寺上にハ河原子山口此一戦にも山寺之衆徒心添いたせし事
何者か山形へ訴人しけるや義光公以の外の御立腹
にて大勢を差向けられ衆徒残らず召捕磨き之の由聞へけ
れハ山内の衆徒僧俗等取物も取あへず皆く何方へか
逃行きけるされば従て奥の院の常燈明も消へて三十
余年の間消へたるを衆徒といふも愚かなりされ此燈明と
申ハ昔し天笠霊鷲山の燈明を唐の天台山に傳へて

傳教大師天台山より叡山へ移し玉へ是を山寺の
奥の院へ移し玉ふ処の燈火なり実に稀有燈火也
此故に義光公の伯父出家して海しまと名づけ御慈
しミの余り義光公へ御歎き中叡山へ登り燈明の火
を持来り玉ひて山寺奥の院へ移し玉ふ中頃元亀
の乱の時叡山の燈火消へて山寺より登せて移しける
されハ迹失せし山内の宗徒相そへたていとし元の如く宝物
等も取返しぬれ共多分紛失ある由也朱印多御取上
まて朝廷より仏前燈油田千四百廿石計りになり

06153

山形県立図書館
1-0324859-5